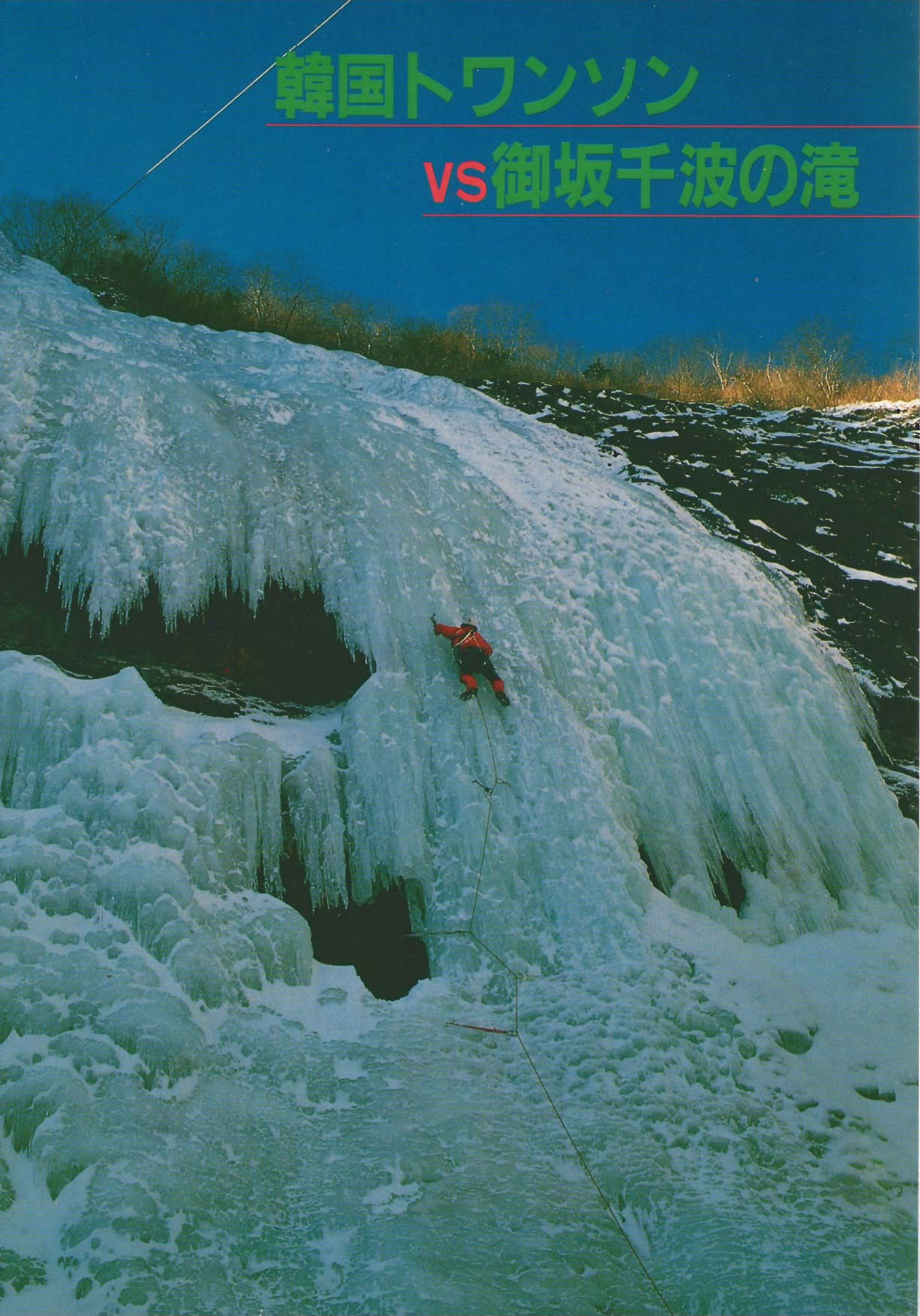
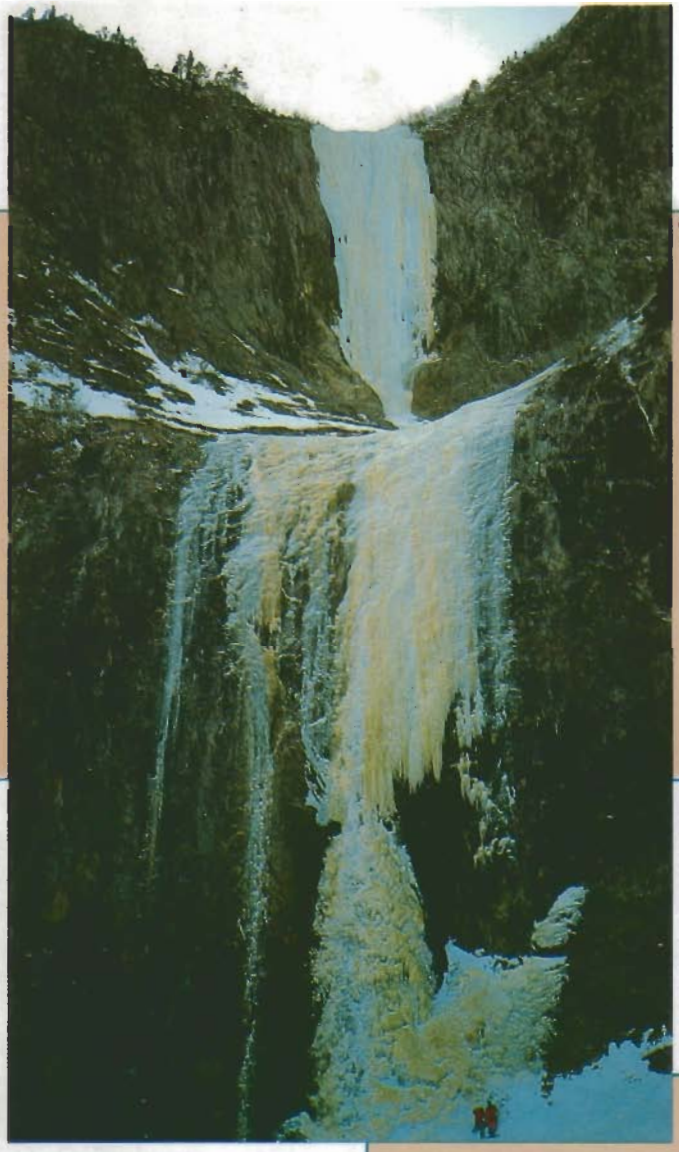
韓国トワンソン
VS御坂千波の滝



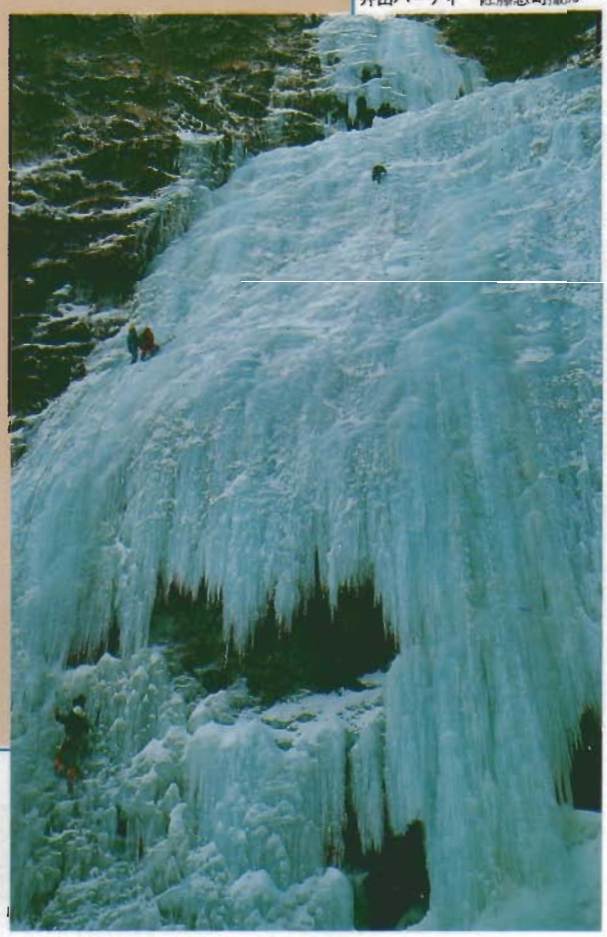


トワンソンの上部氷瀑と下部氷瀑をながめる

トワンソン上部氷瀑4ピッチ目を登る米井輝治

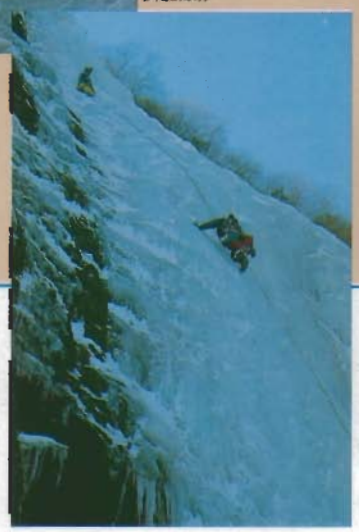
トワンソン上部2ピッチ目をユマーリングする

千波ノ滝1、2ピッチ目を登る井出パーティ　佐藤忠司撮影



最終ピッチを登る鈴木荘平　鈴木昇巳撮影

千波ノ滝Ⅱピッチ目を登る松本＝宮崎パーティ　鈴木昇巳撮影



千波ノ滝Ⅱピッチ目の氷柱を登る戸田パーティ　川辺孝道撮影→

ワンディアッセント

2月10日
米井輝治（日本登攀クラブ）寺嶋幸雄

1983年12月に日本に帰ってからの第一の目標を土旺城登攀に定めていた私は、日本登攀クラブの集会のおり、会員達に打診したが返事は無く、昨年の土旺城試登の経験のある寺嶋幸雄を誘う。出発直前に、星野則雄の参加が決まり日程も2月7～2月16日の10日間に決定した。

冷え込みの厳しい2月7日早朝、寝不足気味の体を引き摺りながら成田空港に着くと、2人は既に来ていた。相変らず汚れた服をまとった2人。これから海外に出かけるというよりも、日雇いの作業をしに行く感じだ。昨年末に帰国したばかりだし、海外放浪の長い2人にしてみれば無理もないだろう。私達は皆シャモニで知り合った仲間である。三十路を過ぎた男ばかり、ヴァーティカルアイスクライミングなどと流行を追うようなクライマーではないし、韓国に行く金があり、暇を持てあましているという事で計画は成り立ったのである。

2月8日、1週間分の食糧を持ち、馬雀洞のバスターミナルより束草に向かう。束草からはタクシーに乗り継ぎ、土旺のペンションに投宿。車道から見上げた土旺城の上段は圧巻であった。

2月9日、暗いうちに氷結した川を渡る。約2時間で、幕営予定地である土旺城の下部数100㍍地点に到着する。2月上旬にクラブの後輩達が、土旺城を登る予定であると聞いていた。彼ら3人が上段を登り始めているのが手に取るようにわかった。テントの中から終日彼らの登攀振りを眺めていたが、かなり手古摺っている様子である。そのうち、下段から登って来た2人の韓国人パーティにも追い付かれる。

辺りはすでに暗く、時々テントから顔を出すと、ヘッドランプの灯がユラユラと揺れ動き幻想的な光景であった。ふと光が落下し、2、3度バウンドして上段の滝の中間で消えてしまった。流星だろうか？　いや、トップが落ちたのだろう。一瞬の出来事に頭が混乱してしまう。転落したにしては、悲鳴が聞こえず、確保者の叫び声も聞こえない。10～20分経っただろうか、光の消えた地点より、少しづつ上に光が動き始めた。韓国語で話しているのが聞こえて来る。やはりトップが落ちたのだ。40～50㍍程落ちたに違いない。

「米井さん」と呼び掛ける声に起こされる。時計をのぞくと午前2時である。テントの外に後輩の山上が立っている。今下降して来たばかりだという彼に氷のコンディションを聞く。そして1日目に下段を登ってテントに戻り、2日目に上段を登った事を知る。

アイスクライミングに定評のある山上が、パートナーに恵まれなかったとはいえ、上段だけで12時間を要したと知り、私達が1日で上下段を完登するのはとても無理だろうと判断した。そこで寝袋やコンロを持参し、ワンプッシュで登る事にした。

2月10日朝、6時頃出発準備をしていると、山上と熊谷が、さぞかし眠いだろうにわざわざ見送りに来てくれた。やはりクラブの仲間は心が通じる。熱い感激と共に、仄かな闘志が湧いて来る。午前7時、取付に着き、米井寺嶋＝星野というオーダーを決める。2番手以下は、タクティクスの面で、ユマーリングする事を決めていた。

緊張した一瞬が流れ、登攀開始。最初の5㍍は右寄りに直登し、ロウのピトンを打ってランナーをとる。それから左上気味に垂壁をトラバースするが、ツララの集合体で不安定極まりない。ハンマーやピッケルがまったく効いてくれず、引っ掛けで登るので精神的に疲れるピッチだ。ケニヤ山ダイヤモンドクーロワール上部の氷壁を連想させられる。30㍍ばかり登った左寄りに、ピトンとボルトの打ってあるテラスに着く。登り始めとはいえこのピッチをリードするのに実に1時間余を要してしまった。2番手の寺嶋は、ピトンを回収しながらユマーリングして来るが、3番手の星野は初めてのユマーリングなので要領を得ずなかなか上がって来ない。すでに私は2ピッチ目をリードしているし、時間を無駄に出来ない。

そのうち、とうとう星野が登攀を諦め、ロープを解いてしまった。2ピッチでほぼ下段はおわりであるが、いつの間にか星野は尾根を登って下段と上段の中間に上がって来ている。時間的にノービバークで登れそうなので、星野に不要なコンロ、寝袋、食糧等を預け、圧倒的な上段を登り始める。

最初のピッチは50度位だが、2ピッチ目（実質上1ピッチ目）は、90度の垂壁である。滝の中央より直上し、15㍍位登ったところより左上気味に弱点を選んで登る。最もパワーのいる困難なピッチだ。

3ピッチ目は簡単そうに見えたが、いざ取付いてみると80～90度の垂壁である。

寒波が去ったのだろうか。気温が上がり、しずくが舞って来て衣服やロープを濡らす。ヤッケはバリバリになり、ロープは針金のようになってしまった。一刻も早く、こんな氷漬けの世界を抜け出したいと思いながらも、遠望される束草の街や、横たわる日本海に眼をやると、不思議と心が和み、新たなファイトも湧いてくる。

4ピッチ目もやはり左寄りの弱点を登るが息を抜けない。先が見えて来たので以前より増して慎重に登る。最終ピッチの5ピッチ目（上下段7ピッチ目）は幾分傾斜が落ち45㍍いっぱいのところで落口脇のブッシュにロープを固定。16時、寺嶋が気持良さそうに上がって来る。

尾根を少し下り、立木を利用して懸垂を繰り返していると陽も落ちかけてきた。私達のささやかな1日のクライミングも終焉を告げテントに帰着する頃には、とっぷりと陽が暮れていた。

（米井輝治）

沸きに沸いたアイスクライミング
御坂・千波ノ滝と南ア・荒川出合

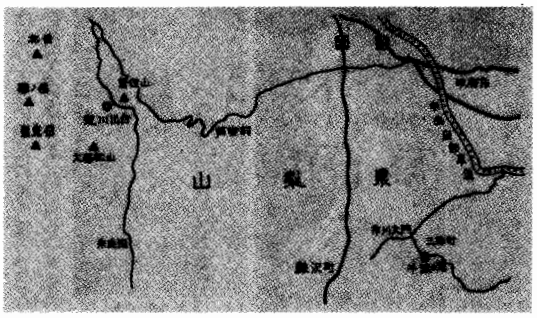
この冬、富士山の前衛の山として知られる御坂山塊北面、芦川流域にかかる千波ノ滝が、たて続けに登られた。

1月29日、地元・鶴城山岳会の人たちに紹介され、須田義信氏らが試登。3ピッチ登った。2月2日、この試登に参加した松本正城氏と初見の宮崎秀夫氏が登攀。同日、このパーティを追うように鈴木昇巳、鈴木荘平、橋本覚パーティが登った。2月5日、前日より試登していた井出宗通、外薗信夫、林一久、田中隆パーティが登る。19日には、藤原雅一、神崎パーティ、戸田暁人、倉岡裕之、中嶋正宏パーティが取付く。この氷瀑は、先行パーティがいると落氷の危険が高く、後は取付けない。同日川辺孝道らも千波にやってきたが、2パーティがいたため取付けなかった。28日に出直してきた川辺、中嶋政男、切嶋良パーティは春の訪れにゆるみかけた中を登った。

3月に入って、数パーティが訪れたものの、もう登れる状態ではなくなっていた。

この間、沿道では千波ノ滝の登攀をひと目見ようと、近郊からやってきた人々の双眼鏡と望遠カメラの放列ができあがっていた。

千波ノ滝をめぐるアイスクライミングに関する若干の考察



松本正城

1981年1月26日に御坂にある濁沢を登っている私は、パートナーの島根淳君とこの氷瀑を眺めてはいたが、以後脳裏からすっかり忘れ去られた存在だった。それを登りたいという気持を起こさせたのは、鶴城山岳会の人達の呼びかけで行った1月29日の偵察行であった。当初「100㍍を超える」という話には半信半疑であった。実際間近にその氷瀑のスケールを見て、現在まで登られている氷瀑と比較しても一つの氷瀑としては最も大きい部類のものであることを確信。須田義信氏のリードによる3ピッチの試登で確実に登れると感じ、難易度的に見ても十分に価値があると考え、登って見たいと思った。

2月4日、宮崎秀夫（JMCC）との登攀は5ピッチ、ロープスケール170㍍、最大傾斜約85度で、私の実力からみたら十分満足のゆく登攀であった。所要時間は4時間40分。

傾斜度について、同じ日に登攀した鈴木荘平氏（登攀倶楽部求道心）に聞いたところ我々の感じと一致したので、前記のようになった。難易度は、氷瀑の状態、コンディションとその時々の自然条件により異ると考えるので一概には決められない。また一つの氷瀑でもラインの採り方によって難易度にかなりの差が出てくる。それゆえに難易度を付すとしても一つの目安程度でいいのではないか。傾斜度は難易度を決定する一つの要素ではあるが、それさえも前記の理由により変化があると思う。

中間確保（プロテクション）を取る時、ピッケル等に体重を預けることが人工であるか否かの問題も現在の氷瀑登攀では個々においてその考え方にかなり認識の差があり、統一されていない。管理化された現在の社会で、何も遊びまで管理化？する必要もないと考える。

要は個々がいかに登ったかということをしっかりと認識していればいいのではないだろうか。

（松本正城）

4人では多すぎる

2月4～5日

外薗信夫、林一久（相模の会）、田中隆（JECC）、井出宗通

2月1日夜、黒沢孝夫氏より甲府郊外に千波ノ滝という日本最大級の氷瀑があることを聞きつけ、当初予定した荒川出合を中止し勇んで出かける。4日朝、舗道から河原をはさんで対岸を仰ぐと、藪山のなかに予想外に見事な氷瀑が氷のカーテンとなって稜線付近からおちこんでいる。

基部に立ち、手強い獲物でも見るようにじっと目をこらすと果たして我らのかき氷の技術で完登できるのかしらん、という考えが頭をもたげる。負け犬よろしく尻尾をまいて逃げるのが関の山と。しかし、せめてゲレンデ気分で試登はしたい。

1ピッチ目、外薗信夫がリード。壁のほぼ中央のデコボコなへんな氷を相手に苦戦している。ダブルアックスはやめて両手を使ったバランスクライミングのほうがいいくらいだ。左上するあたりから垂直になり、どうにもフンギリがつかぬらしい。スナーグが何本もほしいところだ。支点に信頼がおけぬ以上、トップの墜落は許されぬ。フェアじゃないといわれようが、背に腹はかえられぬ。とひょっこり顔をのぞかせている岩にボルトをぶちこむ。これを利用するならワングレードおちるかもしれない。さらに5㍍のばしたあたりで固定する。本日はあきらめムードだ。そのあとトップロープと氷のボルダリングをして遊び、翌日に期待する。

5日、昨日の到達点より数㍍のばしてピッチをきる。テラスのくず氷がブロックになって降ってくる。我が変則4人パーティは遅々として、時にはイライラする、決してすっきりした登り方とはいえない。

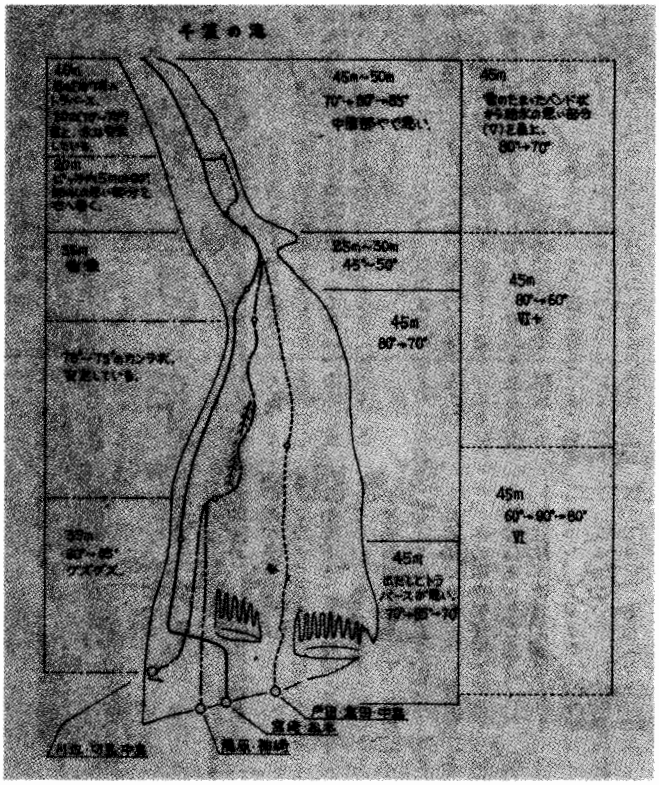
2ピッチ目、傾斜はあいかわらずきついが、氷の質がいいせいか、スムーズにロープが動く。

3ピッチ目、30～40度のナメ状。いよいよ最後、4ピッチ目。ルート中第二の核心部だろう。〝くの字〟をリードする田中隆が、ぬけ出る手前10㍍のランニングがとれない、スリングが足りない、といってわめいている。頭上から姿がなかなか消えない。フォローは気楽なものでトップの奮闘中、馬鹿話に花をさかせている。

ビレイ点からやわそうにみえた出だしもけっこう悪い。アックスのひと振り、キックのひと蹴りに緊張感を持続させつつ徐々に高度をかせいでいく。

加えて薄暗くなりはじめ、あたりの様子がはっきりわからぬ。なんでこんなとこ登らにゃあかんのや、と悪態をつきながら登る。

全員そろったのが17時40分。暗い中、下降路を発見できず、尾根道を3時間トボトボ歩く。（井出宗通）



2P目は傾斜も緩くなりいくつかのラインが採られているようだ。

千波ノ滝1P目と2P目を登る井出パーティら4人。佐藤忠司撮影